それぞれのクリスマス。

ゆチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それぞれのクリスマス。

【Ｎコード】
Ｎ７６１３Ｆ

【作者名】
ゆチャン

【あらすじ】
色んな年齢、環境にいる女性に訪れるクリスマス。

フリーター。（前書き）

クリスマスは、いい思い出がない。

フリーター。

綺麗に光るイルミネーション。
陽気に流れるクリスマスソング。
少しだけちらつく雪。

今日はクリスマス・イヴ
だけど、浮かれてる人ばかりじゃない。

それがあたし。

クリスマスにはいい思い出がなかった。
小学校のあるクリスマスに両親が離婚して
どっちも引き取らなかったから
父方のお祖母ちゃんに引き取られた。
中学校では両親がいないからって虐められた。
きっかけはクリスマスにサンタが来たことある？ってことだった。
味方はお祖母ちゃんだけだった。
高校は両親の仕送りと自分のバイト代で何とか通った。
高校３年のクリスマス、たった一人味方のお祖母ちゃんが死んだ。

そして今日はそれから2年後のクリスマス。
高校を無事卒業してフリーターになったあたしは
１年３６５日バイトばっかりしてきた。
幸い友達はいなかったから、お金を使うこともなくて
一人暮らしには少しいい所に住めてる。
両親との関係は高校卒業するまでだった。

最後に会ったのがいつだったかすら思い出せない。

そんなクリスマスの今日も勿論バイト。
この時期は少し時給がいいから、いつもは１つだけど
２つするようにしてる。

昼間はいつもの喫茶店兼レストラン。
夕方からはケーキ屋で短いサンタの格好をしてケーキの売り子。
寒いけど、時給はいいから背に腹は変えれない。

ケーキ屋はこの辺にしては珍しいタイプのケーキ屋で、
宅配なんかもやってる。
宅配はバイク乗れる人が優先的にまわされる。
宅配のがお金はいいので、あたしは勿論宅配。
バイク乗る時はコート着用可なんだけど、
届け先に着いたらコートを脱いで行かなきゃならない。

「フロマージュです、ケーキ届けに参りました」

この格好になることはもう慣れた。
高校を卒業してから毎年そうだし、この時期は何処の店員も同じ格好してる。

「わーお姉ちゃんありがとー」
「毎年ご苦労様」
「いえ、みなさんの嬉しそうな顔を見れればそれで」

上辺だけの笑顔にも慣れた。
笑顔でいると、お客さん達は喜んでくれる。
店長は笑顔でいることはとても大切なことだ、って言ってたけど

あたしにはむしろいらないとさえ思う。

今日の宅配は４件。
全部終わって、そのまま帰宅。
毎年働くからか、サンタ服は自分で持ってるように言われてる。

バイクを止めて、公園に入る。
ベンチに荷物を置いて座る。
自分用に買ったコンビニの小さいケーキを食べる。
寂しいとか、辛いとか、そんな感情はない。

「Ａ　ｖｅｒｙ　Ｍｅｒｒｙ　Ｘｍａｓ
Ａｎｄ　ａ　ｈａｐｐｙ　Ｎｅｗ　Ｙｅａｒ
Ｌｅｔ'ｓ　ｈｏｐｅ　ｉｔ'ｓ　ａ　ｇｏｏｄ　ｏｎｅ
Ｗｉｔｈｏｕｔ　ａｎｙ　ｆｅａｒ」

この曲は何故か覚えてる。
まだ両親が離婚する前に、よく父親が聞いていた歌。
ジョン・レノンはいい奴だったとか
まるで知り合いのことを話すように父親は言っていた。

「その曲は一人で歌うもんじゃないんだよ」
「・・・？」
「ジョンとヨーコが２人の子供たちの為に作った曲なんだ」
「高梨さん・・・」

バイト先ケーキ屋のフロマージュのパティシエの高梨さん。
かっこいいとか言われて、雑誌やテレビでも紹介されてる人気者。

「何か用ですか？」
「いんや？」
なら何で来たんだろう？と思った。
もう時間も遅くなってきてる。

「また1年か」
「え？」
「君がうちの店に来なくなる」
「そうですね、今日が終わればまた1年」
普段はケーキなんて食べないからケーキ屋にも行かない。
本当にこのクリスマスの時期にだけだ。

「・・・これ、渡すためにきたんだ」
「？」

四角い大きな箱と小さい箱、そこにはあたしの名前が入っていた。

「俺から君へクリスマスプレゼントと誕生日プレゼント」
「・・・」
「店長から聞いたんだ、何かしてあげたいけど、あの子はそういうの受け付けないだろうからって」
「・・・じゃあ何で」
「俺が個人的にあげたいだけ」

高梨さんから受け取った箱。
膝の上に置いて、眺める。

誕生日プレゼントをもらうのは何年ぶりだろう。

お祖母ちゃんが死んでからだから2年ぶり？

「なぁ、雅ちゃん」
「はい？」
「バイトしてるとこ教えてよ」
「・・・」

高梨さんは立ち上がってあたしの方を見てる。
小さい箱を見る。

「教える訳ないじゃない」
「・・・やっぱりなぁ。本当入る隙間ないんだから」
「誰かに簡単に踏み込まれちゃ、あたしでいる価値がなくなる」

自嘲気味に笑った。
高梨さんは微笑んでる。

「んじゃ一人で辛いなら、電話してよ」
「辛いと思わないのでしません」
「じゃあ、泣きたくなったら」
「泣きたくならないのでしません」
「じゃあ」
「・・・何があっても電話しませんよ」

大きい箱を片手に持って、それを床に落とした。
グシャッという音と箱の隙間から見えるケーキの破片。

「一緒に歌おうよ」
「は？」
「ジョン・レノンとオノ・ヨーコみたいに」

「・・・そんな楽しいクリスマスは別にいらない」
「楽しくなくてもいいんだ」

この人、引き下がる気はないらしい。
落ちたケーキをわざと踏み付ける。

「折角ならお酒奢ってくれません？」
「あぁ、そっか２０歳だもんね」
「今からうちで２人だけの楽しくないクリスマスパーティでも」
「いいね、それ」

バイクを押しながら、家路に向かう。
高梨さんは落として踏み付けたケーキのことは何も言わなかった。

道中の歌は勿論
ジョン・レノンとオノ・ヨーコのハッピー・クリスマス

「Ａ　ｖｅｒｙ　Ｍｅｒｒｙ　Ｘｍａｓ
Ａｎｄ　ａ　ｈａｐｐｙ　Ｎｅｗ　Ｙｅａｒ
Ｌｅｔ'ｓ　ｈｏｐｅ　ｉｔ'ｓ　ａ　ｇｏｏｄ　ｏｎｅ
Ｗｉｔｈｏｕｔ　ａｎｙ　ｆｅａｒ」

雪が降り出す。
サンタ服にコートなのにちょっと暖かいくらいだった。

「クリスマスなんて従来楽しい思い出の人のが少ないんだよ」
「みんな本当は辛いのに隠してるのかも」

「雅ちゃんは？」
「辛いと思ってないからいいの」
「なんだ、それ」

クリスマスは毎年訪れる、その度にこの歌が流れる。
ジョンやヨーコにも辛いと思うクリスマスがあったのだろうか。

「はー飲み過ぎた」
「・・・」
「高梨さーん」
「・・・えへへ」

結局そのまま飲み明かしたあたしと高梨さん。
先に潰れたのは高梨さんだった。
コタツで寝てる高梨さんを眺める。
寝ながら笑ってるなんて変な人。

「So this is Xmas
And what have you done
Another year over
And a new one just begun
And so this is Xmas
I hope you have fun
The near and the dear one
The old and the young

A very Merry Xmas
And a happy New Year
Let's hope it's a good one
Without any fear」

高梨さんと付き合うようになったのは
それから半年ほど経ってから。

別に好きじゃないんだけど
居心地が良かっただけ。

「ねぇ、雅」
「ん？」
「ケーキ落とすの辞めない？」
「やだ」
「なんで」
「ケーキ嫌いだから」

これが幸せっていうのかな？
わからないけど、楽しいと思えるからいいじゃない？
みんなにも幸せが訪れますように。

フリーター。（後書き）

何か一回投稿したのに消えた。。。
お久しぶりですw
最初からこれですけどww
あと４作投稿しますー。

OL。（前書き）

笑顔でいること、それが約束。

OL。

昔から始める前なのに無理だって決め付けることは嫌いだった。
だから、遠距離恋愛になるって聞いた時
何よりも笑顔でいることにしようと心に決めた。

今年もクリスマスが訪れる。
遠距離恋愛を始めて3年目の冬。
今日は本当に久々に会える日。
待ち遠しくて、待ち合わせの３０分も前に着いちゃった。

出会いは6年前の夏場。
あたしがまだ１８歳だった頃。
大学案内をしてくれたのが大学2年、２０歳の彼。
眼鏡を掛けたクールな好青年。
それが印象だった。
その時は別にそんだけで、何もなかった。

再会は2年後。
あたしが２０で相手が２２。
相手はあたしがこの大学に進学したって思ってなかったらしい。
それから、あたしと彼はよく会うようになった。
学部が同じだったこともあり、勉強を見てもらったり、
お昼を一緒に食べたり、時間が合えば一緒に帰ったり。

半年後くらいに付き合ってほしいと言われた。
素直に嬉しくて、泣いたのを覚えてる。

彼は企業に就職した。
大学が結構いい所だったから割と大手企業。
これからバンバン働くよって嬉しそうにしてたのを覚えてる。

大手企業の割りに休みはしっかり取れていて
結構会うことが多かった。
お互い結構マメだったから、イベントなんかも忘れなかったし。
平日は会えたとして夜から日付が変わるくらいまで。
それだけでも会えることがとても嬉しかった。

その日のことは今でも覚えてる。
大学の昼休み、次の時間は授業がないからって
友達と2人でお昼を食べてた時だった。

『もしもし、今大丈夫？』
「うん、どうかしたの？」
『今日時間あるかな』
「17時には大学出れるけど」

『わかった、１８時半にいつものとこで』
「うん、わかった」

予感みたいなものはあったんだと思う。
いつもと何処か違うってそんな感じがしてた。

「はるか、こっちこっち」
「お待たせ、少し遅れた」
「ううん、大丈夫だよ」

会うのは先週ぶりだった。
いつもと同じように見えるんだけど
何処か違う。

夕飯を食べようということになって
レストランに入った。

「今日はね、大事な話をしようと思って」
「大事な話？」
「うん・・・」

眼鏡を外して、テーブルに置く。
これは癖。
ちゃんと目を見て話したいからって
それは真剣な話をする前触れ。

「めんどくさいから本題から話すよ」

「う、うん」
「・・・異動が決まったんだ」
「・・・異動？」
「来年度から大阪の本社にね」

心臓をギュッと掴まれたようなそんな感じだった。
お互い何も言わない。

「それで、これからのことなんだけど」
「・・・・・ない」
「え？」
「別れたくない・・・！」

自分でも驚くくらい大きい声だった。
心臓の音がうるさい。
フッと相手の笑う声が聞こえた。

「俺もそのつもり」
「・・・」

その笑みでどれだけ支えられてるかって気付くの。
心臓を掴んだものがゆっくり離れてくのがわかった。

あたしが２１歳、相手が２３歳。
そんなあたし達の遠距離恋愛が始まった。

最初は無理だってみんなに言われた。
でも無理って決めたら無理なんだって思ってたから

あたしが笑顔で送ろうって決めてた。

1年に数回会えればいい方だった。
就職して1年で異動なんてことはその会社ではよくあることらしい。
それだけ忙しいんだよって電話では嬉しそうだったけど、
でも会えないのは実際辛かった。

『今年はクリスマスに帰れるよ』
そう電話で聞いた時は心の底から嬉しかった。
異動が決まってから年末は忙しいって言ってたし
よかったねって言ったら、上司が日ごろがんばってるからって
特別にくれたんだって言ってた。

時間までもうそんなにない。
気付いたら雪が降ってきてる。

「お嬢さん、傘はお持ちじゃないんですか？」
「・・・忘れちゃった」
「そんなら俺の傘なんてどうです？」
「そうねぇ、入れてもらおうかしら」

目の前に現れたスーツ姿の男にあたしは目を細めた。
大きいキャリーバックにコンビニで買ったと思われるビニール傘
相変わらずの眼鏡の奥の優しい瞳。

「零、おかえり」
「ただいま、はるか」

嬉しそうに頬緩めちゃって
あたしは零の手を取る。

「手袋してないと寒くない？」
「平気だよ、手繋いでれば」

そうやって紳士っぽく手を繋いで自分のコートのポッケに入れる。
こっちがドキドキしてることに気付かない。
それが零のいい所でもあり悪い所。
天然ていうのかな？

「仕事はどう？」
「毎日大変、ニコニコしてなきゃいけないし」
「受付は会社の顔って言われるくらいだからね」
「本当よ、全く」

フランス料理を食べながら話すことは仕事の愚痴。
これがあたし達らしさだったりする。

「ねぇ、はるか」
「ん？」

零が眼鏡を置いた。
あの癖。
真剣な話？

「・・・実は来年の1月にこっちに戻ってこれるんだ」
「え・・・」
「東京支社に戻ってくることが正式に決まったんだよ」

「・・・」

嬉しそうにニコニコしてる。
霊はあたしの手を取って、優しく握る。

「3年間待っていてくれて、ありがとう」
「ううん、いいの・・・」

泣くなんて柄じゃないのに涙は止まらない。
零は本当に嬉しそう。

「だから、一緒に住もう？」
「・・・」
「驚いた顔してる」
「そ、そりゃするわよ！」

手を繋いで、あたしの家に向かった。
実家には年明けに戻ればいいって言ってる。

「クリスマスプレゼントは準備してないんだけど」
「・・・いいの」
「え、いいの？」
「うん、だって零がこうやって帰って来てくれたことが何よりのクリスマスプレゼントだもの」

明日、一緒に近くのケーキ屋さん行こう？
あそこならきっとケーキがあるはず。

美味しいケーキを一緒に食べて
幸せだねって言い合おう。

幸せなクリスマスの訪れ。
みんなにも幸せが訪れますように。

OL。（後書き）

ＯＬって難しい・・・ｗｗ
遠距離恋愛はしたことないと思いますが↑
いあ、うん、大変ですよね、本当にｗｗｗｗ

高校生。（前書き）

みんな幸せそう。
でもあたしだって！

高校生。

毎年のようにみんな幸せそうに過ごす日。
そんな人たちをあたしはここから見てきた。

そう、このケーキ屋のカウンターから。

「あかりー、これ出してー」
「はーい」
「つまみ食いしたら怒るからねー」
「ば、ばれてる」

あたしはこのケーキ屋、フロマージュの一人娘。
うちの店はちょっと湯名でテレビとか雑誌で特集されてたりする。

クリスマスは毎年1週間前から大忙し。
あたしは手伝いに借り出される訳だけど、

今年はちょっと違う。

「あかり」
「おはよ、矢部くん」
「おはよ」

あたし１７にして初彼氏出来ました　キラーン
１２月頭に付き合いだしたの。

「今日も寒いね」
「そうだな」
「矢部くん手袋しないで平気なの？」
「ああ、平気」

ずっとこんな感じだけど、付き合ってるのよ！
店の手伝いして、バイト代もらってるし、
クリスマスは２人で過ごしたいなぁ

こういう場合って女の子から誘っちゃいけないものなの？

「どーなのカンちゃん！」
「どうなのってあたしに聞かないでよー」

カンちゃんとこ神崎美枝ちゃんはあたしの親友。
高１からのお友達なの！

「カンちゃんとこはどうなの？」
「うちは一緒にいるのが普通だからなー」

カンちゃんには中学の頃から付き合ってる彼氏がいる。
高校は違うんだけど、それでも放課後はずっと一緒にいるから
あたしも何度も会ったことある。

「誘う、誘わないの問題じゃないってことなのね？」
「告白は矢部からなんだから、待ってればいいと思うけど」

カンちゃんはクリスマスなんだから、男から誘わないと。しかも付き合って最初なんだし。
とミルクティーを飲んで続ける。

カンちゃんの言う通り、告白は矢部くんからだった。
1年の頃から、有名だった矢部くん。
頭がよくて、それなりにかっこよくて
あたしはいつでも遠くから見ている存在だった。
2年で同じクラスになって、名前順の関係で席が近くなったけど、
それまでと同じ、遠くから見つめる存在。
話したことも数度、それも義務的な会話だけ。

告白された時のことは今でも覚えてる。
12月に入ってそろそろコートを着なくちゃいけないなって時に
委員会で帰るのが遅れたあたしは教室に寄って、帰ろうとしてた。
寒い寒いと言いながら、廊下を走って教室に入ると
そこには矢部くんがいた。

席が近いからゆっくり近づく。
心臓の音が大きい。
何か話したい。何か矢部くんの中にあたしっていう存在を。
無理だってわかってるのに、恋は盲目ってこういうことなのかもね。

「・・・矢部くん、じゃあね」
「・・・・・・あ」
「ん？」

矢部くんは振り返って、あたしの目を真っ直ぐ見てた。
あたしは思わず、緊張してしまう。

「ちょっと話したいことがあるんだけど」
「・・・話したいこと？」
「ああ、うん」

自分の席、つまり矢部くんの斜め後ろに座る。
矢部くんは前を向いたままだ。

「ずっと」
「ん？」
「ずっと言おうと思ってたんだ」
「・・・何？」

その間の時間は忘れない。
短かったけど、とてつもなく長く感じた。

「ずっと好きだったんだ」
「え」
「君のことが・・・」

一瞬殴られたみたいな感じだった。
誰が？誰を？何で？とかそんな疑問がたくさん浮かぶ。

「付き合ってくれないかな？」
「・・・うん！」

今覚えば何で矢部くんはあたしのこと好きになってくれたんだろう。
結局あの時浮かんだ疑問はそのまま。
矢部くんは、あたしを見てたってこと？

カンちゃん、どうしよう。
クリスマスは明日だよ。

「矢部くん、帰ろ」
「ああ」

矢部くんはいつも無口。
あたしばっかり話してる。

「・・・あかり？」
「え、あ」

気付くと足を止めてた。
動かない、どうして。

「ごめ、先帰る」
「！あかり！」

走ってその場から逃げた。
矢部くんは追いかけてこない。
涙が止まんない。

「ただいま・・・」
「おかえり、あかりちゃん」
「高梨さん」

高梨さんはうちの人気パティシエ。
女性に人気の人。

「どうしたの、泣いたの？」
「見てわかるでしょ！」
「あぁ、そうだね。ごめんね」
「もうやだぁ」

その場に泣き崩れたあたしを高梨さんは部屋まで連れてってくれた。

「彼氏置いてきた？」
「うん」
「そっかー」

高梨さんを始め、親も店員さん達もあたしが彼氏いることは知ってる。
毎日一緒に登下校してるからね。

「だって何も言ってくれないんだもん」
「でも好きだって言ってくれたんでしょ？」
「うん」
「だったら信じてあげなきゃ」

「・・・」

涙は止まった。
タオルで顔を抑える。

「あかりちゃんもその子のこと好きなら信じてあげなきゃ」
「・・・信じる」
「うん、それが大事」

高梨さんは笑顔でポンポンと頭を撫でてくれた。

「高梨さん、ケーキ作りたいの、教えて！」
「ＯＫ、任せて！」

矢部くんにはあとで連絡しておこう。
あたしの思いをケーキに込めて、全部伝えよう。

結局矢部くんからのメールの返事も電話に出ることもなかった。
でも朝には迎えに来てくれた。
お互い何も言わないんだけど。

「放課後、一緒に行きたい所があるんだ」
「行きたい所？」
「ああ、ついてきてほしい」
「わかった」

ケーキはうちの冷蔵庫で眠ってる。
矢部くんの用事のあとに帰ればいいよね。

お昼に高梨さんからメールが届いた。

『ケーキの様子見たけど、美味しそうに出来てたよ！
あかりちゃんの思いが詰まったケーキだからね。成功すること祈ってる！』

この人何で彼女作んないんだろうと思った。
モテるのに、不思議。

「あかり、帰るよ」
「うん」

いつもと同じ放課後。
だけど、矢部くんが何処か違う。

「ここなんだ」
「ここって・・・」

その場所はうちのケーキ屋が見える喫茶店だった。
視覚的にうちからは見れないけど。

「1年の時からついこの間までここでバイトしてたんだ」
「そうなの？」
「ああ、ずっと見てた」

懐かしそうにうちの店を見る。
幸せそうなお客さんたち。

「あかりはいつも楽しそうに店を手伝ってて、表情がくるくる変わるし。
嬉しそうにお客さんを眺めてて、それを見てるのが好きだった」
「知らなかった・・・」
「言わなかったから」

矢部くん、少し恥ずかしそう。
いつもと違う。

「俺あんまり話すタイプじゃないから、
あかりが不安がってるのは気付いてたんだけど、どうにも言えなくて」
「そっか」
「言わなくてごめんな？」
「ううん、いいの」

嬉しくて泣きそうなのは内緒。
矢部くんはあたしの手を取る。

「これからもよろしく」
「こちらこそ」

それから2人でうちの店に向かった。
あたしの部屋であたしが作ったケーキを食べる。

「美味しい」
「良かった」
「あかり、パティシエになれば？」
「えー、そうだなぁ」

ねぇ、気付いてる？
ちゃんと思いを伝え合ってから
矢部くん話してくれてるって。
凄く嬉しいの。

「あかり、笑ってる」
「そうかな？」
「絶対ね」

矢部くんも嬉しそう。
多分お互い辛かったんだ。

その日、うちで行われたクリスマスパーティに
矢部くんも参加した。
家族だけのものだから、親とかもいたけど
矢部くんのこと気に入ってくれたみたい。

「あかり」

「ん？」
「そろそろ名前で呼んでくれない？」
「え」
「呼んで？」

何か矢部くん積極的になってる気がする。
なんか駄目だなぁ

「か、要・・・」
「上出来」

それからのこと、
要は今まであたしに干渉できなかった分
したがりになった。

今ではカンちゃんも驚くくらいのラブラブなのよ！

今年のクリスマスからずっと2人きりで過ごせるように
あたしはずっと祈り続ける！

みんなにも素敵なクリスマスが訪れますように。

高校生。（後書き）

家に近くにケーキ屋があるんですが
あそこでバイトしてる子は大変そうだ。
高校生の頃ってよくある話でへこむんだよねw
自分にはそうならないだろうって思ってもw

主婦。（前書き）

２人だけのクリスマス。
あの頃と少し違う特別な。

主婦。

結婚してのクリスマスは
付き合ってる頃とは勿論違って。
１２月入るとクリスマスの飾り付けをして
２人で過ごすには少し広いマンションだけど
旦那様はこれから増えるんだからとはにかんでいた。

今日は結婚してから初めてのクリスマス。
何が起こるのかしら。

その日は旦那様もあたしも浮き足立っていて
朝から２人とも顔がにやけていた。
今日はいつもより更に腕によりをかけて
料理の準備をしなきゃ。
数ヶ月前から近くのケーキ屋さんフロマージュで習ってたから
ケーキもきっと大丈夫なはず。
今日の予定は夕飯、ケーキの準備と旦那様へプレゼントの準備。
「何だか顔がにやけちゃう」

旦那様との出会いは大学1年生。
大学が同じでしかも同じ学部、学科。
名前順も近かったから話すようになった。

今でも覚えてるのは大学2年生の頃。
その頃、旦那様、小野塚恵一さんは付き合ってる方がいて
その悩みを話してくれていました。
女の子の友達もいたけど、異性との友達は恵一さんだけ。

夏休み終わりの文化祭の準備をしてる時、
恵一さんの彼女さんに呼び出されました。
恵一さんとの話題には出てきますが
お会いするのは初めてだったりする彼女。
学部が一緒なだけなので、顔を見たことのある程度だったんです。

「あんたさ、恵一とつるむの止めてくんない？」
「え？」
「恵一が迷惑だって言ってんの。直接言えないからあたしが言いに来たんだけど」

その頃、恵一さんとは話してすらいなかった。
連絡もなかったし、大学にもそんなに来ていなくて。

「・・・あ、そうでしたか。わかりました」
「本当やめてよね」

恵一さんから聞く彼女はもう少し優しい感じだった。
何よりも恵一さんのことを考えている、そんな人だと思ってた。

それからあたしは恵一さんと出会う前の生活に戻っていた。
だけど心にぽっかり穴が開いたみたいな、そんな感じで。
心が痛かった。

ある時、恵一さんから電話が来ていた。
あたしは勿論出ることも出来ず、ただ鳴っている携帯を見てるだけ。

「・・・何でこんな気持ちなんだろう」

ただ胸が痛くて、切なくて、
恵一さんと話したいとか、会いたいとか
そんな風に色んなことを思って涙が零れた。

その時期、時間を埋める為に地元の本屋でバイトをしてた。
本は好きだったし、初めてのバイトは本当楽しくて
でも心に開いた穴は埋めることが出来なかった。

「岩崎さん、今日はもうあがっていいよ」
「あ、はい。お疲れ様です」

恵一さんの彼女さんに言われて3ヶ月ほどが経ち
季節は冬間近だった。
大学の関係で一人暮らしをしていたから
帰りに買い物をしていくのがいつものことだった。

「こんばんわ、おじさん。何か安い物ありますか？」
「あぁ、今日は鍋の具材が安いよ」

「ならその一式くださいな」
「あいよ！」
商店街の人たちはみんな良い人たちばかり。
八百屋のおじさんはいつもお世話になってます。

「日向！」
「・・・！」
「お前、何で！」
「おじさん、これお代！」
何故だかわかんないけど
逃げ出したくなった。
おじさんにお金を渡してその場を立ち去る。

「おい、日向！！！」
「・・・何で」
恵一さんに手を掴まれて、狭い通路で足を止める。
涙が止まらない。
「・・・日向」
「・・・」
「聞いた、日向が俺から話聞くのもう嫌だって」
「・・・」
恵一さんが掴んでた所が痛い。

声が出ない。

「・・・違う」
「え？」
「彼女さんが小野塚くんが迷惑してるからって」
「・・・」
「だから離れたの。でも・・・」

涙が止まらなかった。
しゃくりあげて、まるで子供みたいに泣く。

「・・・別れてきたんだ、彼女と」
「・・・え？」
「日向が離れてわかった。俺の大切なのはあいつじゃなくて日向だって」

その言葉を聞いた瞬間に、崩れるように落ちた。
さらに涙が零れる。

「・・・これからは辛い思いしなくていいんだよ」
「ん・・・」

それから少しして
元彼女さんの所に2人で向かった。

恵一さんがあたしと仲良くしてたのが羨ましくて
そんな嘘をついてしまったらしい。

「本当懐かしい」
「何が？」
「け、恵一さん」
「ただいま」

あたしの肩に顎を乗せて
お腹に手を回す。

「クリスマスだから早めに終わらせちゃった」
「まだ午前中」
「いいんだよ」

お腹を摩る恵一さんの手は優しく。
嬉しそう。

「一緒に買い物行こうか」
「え？」
「学生時代に戻ったみたいに、手繋いで」

思い出していたことが懐かしくなって
笑ってしまった。

手を繋いで買い物。
学生時代に戻ったみたいなそんな気分で。

お腹には新しい命。

２人だけのクリスマスをもう少し過ごさせてね？

みなさんにもいつか訪れる幸せなクリスマスを。
誰かと過ごせますように。

主婦。（後書き）

主婦も難しい。
てか全部難しい。
楽しいんだけどねw

小説家。（前書き）

みんなが幸せなクリスマス。
たくさんのクリスマスを書き上げた彼女は？

小説家。

「先生、おはようございます」
「おはよー・・・」
「またコタツで寝られたんですか？」
「だって新しい話考えてたらつい・・・」
「風邪引かれますよ」
「平気よ、そんなやわじゃないもの」

いつもお世話になってるお手伝いの藤原さん。
毎日朝から来てくれて夜遅くまでいてくれる。

「先生、今日何の日か知ってます？」
「クリスマスでしょー。それくらい知ってます」
「あら、クリスマスなんて興味なさそうなのに」
「ないけど、それくらい知ってるわ」

クリスマスは毎年仕事ばかり。
いつもいつも愛用のＰＣに向かってる毎年のクリスマス。

小さい頃は毎年楽しみだったクリスマス。
サンタさんを信じてベッドに潜り込んでたのが懐かしい。

「今は気付けはコタツで爆睡だもんなぁ」
「先生何か言いました？」
「いや、藤原さんお茶ちょーだい」
「はい、今」

そんな今日の予定は雑誌の担当者が来るまで

ずっと続く執筆活動。

こんな日に仕事してる人間なんてそういない。
みんな幸せそうにイルミネーションなんか見ちゃって
羨ましくなんてないんだけどさ。

「先生のん気にマニキュアなんて塗ってないでくださいよ」
「いいじゃない、調度落ちちゃってきたんだもの」
「そんなこと言ってるとまた野上さんに怒られますよ」
「うわ、嫌な名前聞いたわ」

野上幸也
あたしの担当であるその男は、
名前に似つかわしくない性格をしてる。

こんな日にまで仕事をする
仕事大好き人間だ。

「あ、先生話をすればなんとやらですよ」
「は？」
「お電話」

まわしますねーと藤原さんは姿を消す。
数秒後に鳴る子機を睨み付けてやった。

「はい」

『先生、そんなふくれっつらしてないで仕事してください』
「ふくれっつらなんかしてないわよ」
『んじゃマニキュアなんて塗ってないで』
「は、あんたどっかから見てるの？」
『今度は何色です？この間まで赤でしたよね、黒か？』
「・・・・で何の用よ」
『あぁ、忘れていました。お伺いするの少し遅れそうなので１９時くらいになります』
「・・・わかった」
『それまでに話まとめておいてくださいよ』

本当むかつく奴。
全部見透かしてるようで
いけすかない担当だ。

いけすかない担当が当てたマニキュアの色は黒。
むかつくけど、当たるほど昔からの付き合いだ。

あたしがまだ雑誌の一般投稿欄に投稿していた時から
読んでいてくれたらしい。
初めて会った時は物凄い紳士でかっちりスーツのメガネをかけた男。
野上幸也ですなんて笑顔だったのに。
ちょっとかっこいいなんて思った若いあたしを殴りたい。
年齢が１つ２つくらいしか変わんないから年代が一緒なのよね。
そりゃ今だって若い方よ？

マニキュアを乾かしながらクリスマスの話を考える。

年明け早々雑誌に載せる恋愛の物語だ。
恋愛なんてここ数年してないわ。
なんて言ってたら小説家が廃るけど。

コタツに入り横になる。
遠くで藤原さんの声が聞こえる。
あ、駄目だ。
意識が遠のく。
おやすみなさい。

「先生、あなたが書きたいものを書いてください」
「・・・え」
「テーマがなんです、題材がなんです、上がなんです」
「・・・」
「あなたが書きたいものを自由に書いてください」

「・・・でも」
「でもじゃない。あなたは何の為に小説家になったんですか？」
「・・・」
「自分の世界を書きたいなら、自由にそれでいいんです」

なーんて初対面の時に言ってきて
まともな人間だと思ったけど
実際しょうもないやつだった。
編集の他の人間に聞いた話だと
女関係は特にだらしない癖に仕事は出来る奴だから困る。
なんて何回聞いたことか。

いつもいつも人の仕事にうるさい癖して
自分は自由にやってる。
本当むかつく。

「先生、先生」
「・・・は」
「何寝てるんですか、ったく」
「・・・」

目を覚ますと目の前には野上がいた。
呆れた様子の野上を前にあたしは起き上がって時計を見る。

「藤原さんによれば、昼前から寝てたらしいですよ」
「あー考え事しててコタツ入ってそれで寝て」
「で？話は出来たんですか？」

「大方ね」

一瞬野上が驚いたって顔をした。
珍しいわ。

「しかし寝起きからあんたの顔見るなんて最悪ね」
「先生、そういうものは本来口に出さないんですよ？」
「知ってるわ？わざとよ」

野上の咳払いに自分のＰＣと向かい合う。
昨日打ち掛けだったものに文字を足していく。

「そういえば」
「？」
「今日はクリスマスですね」
「そうね、あたしには関係ないけど」

藤原さんは帰ったのだと思う。
きっと夕飯は何かした作っておいてくれたと思うから
あとでチンして食べることにしよう。

「クリスマスに仕事なんて野上あんたも物好きね」
「本当なら仕事したくないですよ」
「じゃあ何で？」

野上の返事が来ない。
あたしは振り返る。

「野上？」
「先生に」

「ん？」
「先生に会いたくて」
ん？ちょっと待って
何で野上はクリスマスに仕事する理由を
あたしに会いたいからって言ったの？
「え、どういうこと？」
「・・・こういうことですよ」
手を引っ張られたと思ったら
野上に抱き締められてた。
「の、野上！」
「本当ならもっと前に言うはずだった」
「・・・」
「あんたの文章を読んだ時、この人の担当になってやるって思った」
「・・・」
野上は淡々と言葉を並べる。
あたしは何も言えない。
「あんたは書く文章とは違って何もかも雑だし、適当だし」
「悪かったわね」
「自分の書きたいものを書けないとなると凄い悔しい顔してたり、
考えにつまるとマニキュア塗ったり、冬になるとコタツで猫みたい
に寝たり」
「・・・」
「そんなとこもひっくるめて好きになったんだ」

野上の顔が見えた。
頬が少し赤くて、目がいつもと違う。

「・・・あたしだってあんたのこと嫌いじゃないわよ」
「・・・」
「好きじゃないけど」
「・・・クッ」

野上今笑った！！！
あたしは野上の腕から離れる。

「野上、今すぐケーキ買ってきなさい」
「・・・」
「あんたが帰ってくるまでに終わらせとくから一緒に夕飯食べるわよ」
「わかった、いってきますね」

野上はコートを着て立ち上がる。
あたしはカタカタとキーボードを打つ。

「・・・黒のマニキュア似合ってるよ、流架」
「！！！！！！！バカ！！！さっさと行け！！！」

恋人という関係ではないけど
大切だという存在が出来たクリスマス。
物語の中の女性たちのような
そんな素敵なものではないけど
あたしたちのクリスマスは
こんな感じ。

生きている人間たちの分、
クリスマスの過ごし方だって五万とある。
今も何処かで誰かが幸せに過ごしてると思うと
とても幸せな気持ちになる。

Ｍｅｒｒｙ＊Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ
幸せが訪れますように。

小説家。（後書き）

この作品でクリスマス作品は終わりになります。
いやー楽しかったｗｗ
読んでくださってありがとうございましたｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7613f/

それぞれのクリスマス。

2010年12月31日14時41分発行